

自己を問う、社会を定位する、世界を築く—存在の根幹を問われたイギリス二〇一九年

イギリス文学の名作のひとつに『ロビンソン・クルーソー』がある。作者はロンドン生まれのダニエル・デフォー。出版されたのは一七一九年で、今年はそのからちょうど三百年にあたる。イギリス国内はもちろん世界各地で、この作品に関連した国際シンポジウムや記念出版、各種の行事がおこなわれた。一般に知られているのは、主人公が無人島から帰還することをもって終わる「第一部」だが、この作品には実はその続編もあり、続編が出版されたのも一七一九年であった。この続編では、主人公が中国から日本へ渡航しようとする場面も描かれている。結局、「日本は危険だ」ということになってこの企ては頓挫してしまうのだが、作者の視野には当時の日本も十分に入っていたことが分かる。主人公が実際に日本を訪れる『ガリヴァー旅行記』（一七二六年刊）とともに、『ロビンソン・クルーソー』は、日本にもゆかりのあるイギリス文学作品と言ってよいだろう。

その『ロビンソン・クルーソー』の冒頭には、実に興味深い一節がある。ブレーメン出身の父を持つ主人公は、はじめロビンソン・クロイツネールという名前であったが、それが次第に訛って、ロビンソン・クルーソーと「呼ばれるようになり、いや、自らもそう呼ぶようになり、またそう書くようになって、知り合いたちも常に私のことをそう呼ぶようになった」というのである。執拗なまでに自分の名前の呼び方、呼ばれ方にこだわる主人公—そこには、自己の存在を確かめ、社会における位置を確認しようとする、自伝的語り手クルーソーの努力がある。自らを語り、自らを問う、それは黎明期にあった近代小説の最も重要な特徴の一つであった。

自己を問うためには、しかしながら、他者を考えなければならない。三〇年あまりを無人島で暮らすことになるクルーソーでさえ、自己を包摂する自然や社会を常に意識していたし、実際この無人島は、フライデーをはじめ、多くの他者が訪れる島でもあったことが判明する。だから、自己を問うということは、必然的に、その自己を含む社会のあり方を見定めることにつながっている。ちょうど二〇〇年前の一八一九年のイギリス・マンチェスターでは、「ピータールーの虐殺」と呼ばれる惨事が起きていた。社会のあり方、特に選挙法の改正をめぐる平和的に集会を開いていた人々の中に騎兵隊が突入し、多くの死傷者を出すことになった大事件である。日本でも、今夏、マイク・リー監督の映画『ピータールー』が上映された。自己を問い、誠実に暮らそうとする人々を「群衆」と呼んで排斥しようとする社会—そういう社会を改め、新たに定位しようとする営為はまた、自己を問う個々人の確固たる意思の表れでもある。

「ピータールーの虐殺」では、特に女性の負傷者が多かったことが指摘されている。武器を持たず、白い晴れ着を着て身なりを整えて集会に参加していた女性を、騎兵隊が標的にしていたことが分かる。男女平等の普通選挙がイギリスで実現するのは、一九二八年。性の区別なく、人間一人一人が共存し、互いの意思を尊重できる社会の実現には、今なお長い道のりが必要であるように思われる。奇しくも今年のブッカー賞受賞作であるマーガレット・ア

トウッドの『テストメント』とバーナディン・エヴァリストの『ガール、ウーマン、ほか』は、いずれも、少なからず抑圧的な社会の中で自己を問い、自己を問う中で社会の新たな定位を模索する女性たちを描いた傑作である。

イギリスの二〇一九年は、言うまでもなく、ブレグジットに揺れた一年であった。ロンドンにひと月ほど滞在していた私も、議会のあるウェストミンスター周辺で、賛成、反対両派がそれぞれ氣勢をあげる様子をたびたび目撃した。そのみならず、例えば、ブロンテ姉妹の故郷として知られるイングランド北部の村ハワースなどでも、「賛成」「反対」のシールがあちこちに貼られていた。ブレグジットは、イギリスの、ヨーロッパの、ひいては今後の世界の動向にかかわる問題でありながら、しかし同時に、イギリスに暮らす一人一人の人間の、その自己規定にも抜き差しならぬかわりを持っている。他国に縛られたくない離脱派と近隣諸国との共存共栄を考える残留派の論争は、結局、総選挙に持ち込まれることになった。その結果は予断を許さない。ただ、ひとつ確実に言えることは、このブレグジット問題が、人々の意識の隅々にまでかなりの深く行き渡っていて、単なる政治的駆け引きに終始してはいないということだ。だから満足の行く解決は難しいとも言えるのだが、しかし、自己を問い、社会を定位し、世界を築く個々人の意思がそれぞれ明確であり、そのダイナミズムがはっきりと感じられるのである。社会の中で、そして世界の中で、自己とは何かを問う三〇〇年前のクルーソーの姿が、今、生き生きと蘇ってくると言っても過言ではないだろう。

原田範行（はらだのりゆき、イギリス文学・慶應義塾大学教授）